

## 第1節 本調査研究から得られた知見・示唆

### 1. 政策課題の発見・発掘に対する重要性の高まり

社会経済情勢が複雑化・多様化する中で、複雑で不確実な困難な問題が多く、課題解決に向けて、諸科学の連携と融合がますます必要となっている。

### 2. 政策課題の発見・発掘のための多様なアプローチ

定性的あるいは定量的なアプローチ、フォアキャストやバックキャストのアプローチなど、さまざまな方法が開発されているが、これらを組み合わせて活用する必要がある。

### 3. 政策課題の発見・発掘の担い手の多様性

専門家の知識や経験を活用した専門知をベースにしたり、専門家の交流による創発を行ったり、幅広い多様なステークホルダーの相互作用を重視するなど、担い手の関わり方に多様性がある。

### 4. 政策課題設定における俯瞰的視点の重要性

政策課題の目的や大きさに照らして、政策体系全体の中での位置づけを明確化するとともに、関係者間でその俯瞰的な視点を共有することが重要である。また、次に述べるように、政策形成プロセス全体における時間への配慮も必要となる。

### 5. 科学者と政策担当者の政策オプションの作成時間に対する共通認識

科学的に必要となるデータの作成や新たな社会的・経済的分析手法の開発まで考慮すると数年単位の時間が必要となるものもあり、一方、政策担当者のごく短期での検討が必要となることが多い。このことを十分考慮し、両者が協働作業を行う際には、お互いの時間感覚を十分すり合わせて共通認識にしておくことが重要である。

### 6. 政策オプション作成プロセスにおける多様なステークホルダーが議論する場の形成と維持

政策課題に応じた政策オプションを的確に作成するために、参画者が利害を超えて独立した見識と見解を述べ、共有するための仕組みとして、適切なステークホルダー間で常に議論を行うための場を形成する必要がある。そのような場の形成につながる多様な関係者との信頼関係を構築しうるネットワーク作りを行うことも重要である。

### 7. 科学と政策の特性と相互の作用

科学と政策はもともと異なる価値観を有するが、これらをつなぐにあたり、相互の行動様式を尊重するルール作りや取組みが必要である。気候変動、BSE問題など

の経験を経て、最近 20 年ほどの間に、各国や国際的組織では両者の役割と責任を規定する原則ないし指針といった形の行動規範について議論され定められつつある。

このような国際的な動向を的確に把握しつつ、政策を決定・実施する政治・行政側と、エビデンスに基づきオプションを作成・提示する科学の側の双方がこのことを共通に理解し、双方が有効かつ健全に連携・共進化しながら活動することが重要である。

### 8. 科学と政策をつなぐ組織・媒介者の役割

価値中立で客観性を重んじてきた科学と、多様な人々・社会を対象として一定の価値の実現を目指す政策とは、価値観も行動様式も異なるため、両者の間にネットワークを形成し、信頼関係を維持・継続していけるような対話を行うための空間と条件を整備することが重要である。また、そのような場において、科学の側と政策の側とが対話をしながら、政策課題毎に適切な政策オプションを作成する機能も重要である。

こうした科学と政策のつなぎを担う組織と機能のニーズは、近年内外で高まっており、その組織の安定性と人材育成の継続が重要である。

### 9. 歴史的認識と立ち位置の重要性

「政策のための科学」は、政策形成プロセスにおける個別の実践事例を収集・蓄積し一般化・継承することが重要である。これにより、科学としての発展を促し成熟させるとともに、政策形成プロセス全体を俯瞰することができ、改めて個々の政策形成プロセス全体を実践する際の立ち位置が明確となる。また政策担当者は、日ごろから世界観と歴史的思考力を涵養し、自ら担当する政策課題について位置づけを明確に認識する能力を持つことが期待される。